

男尊女卑的東洋思想に対する一考察

一巻頭言に代えて一

学校法人昌平黌 理事長
東洋思想研究所 所長

田久昌次郎

わが国の社会構造の変化とりわけ核家族化と女性の社会進出により、古来よりある男尊女卑的東洋思想は拒絶され、草食系男子などと揶揄される若者気質が流布されている。総じて、女性の地位が上がる一方で、男性の社会的自立の遅延が現代社会の傾向ではないだろうか。

この傾向は、戦前の古い封建的制度や儒学的考え方に基づく人間観の指弾に始まっている。つまり、天皇家を筆頭とする家父長制度や長上者に対する「忠」「義」の倫理観、社会的マナー「礼」や服装などの生活様式等さまざまな場面で旧来の考え方が否定され続けたことが原因の一つである。その一方で、従来の概念や規範では対応できない社会問題を眼前にして、それは我々が儒学的考え方や封建的制度を放棄してしまったことに原因があると判断することは余りに早計であるかもしれない。明治維新は、日本における革命と捉えることも可能であるが、政治体制の移譲であり、「和魂洋才」で表現されるように、思想や生活様式の変化は現代よりも緩やかなものであったと想像することは難くない。すなわち、戦前・戦中社会の道德観念や人間生活は、西洋の理論や技術を取り入れながらも、旧来の人間関係を基盤にして維持されていた。それが戦後になって、新たな倫理体系も確立されぬまま、猛烈なスピードでの経済発展・生活様式の質量を伴う変化によって機能不全を起こしている。殊に、家訓のような旧来のしきたり・慣習の伝承力は、戦後世代が四分の三を超えたいま、加速度的に低下することは否めないが、それらは未だ瓦解はしていない筈である。多様化・国際化・個別化した現代社会の諸課題を解決する糸口を見出すことは容易ではないが、本学東洋思想研究所が東洋の教えを再構築する礎石となることを期待している。

親子関係を研究したサイモンズ (Percival M.Symonds 1893～1960) は、親の養育態度について、支配と服従、保護と拒否という二つの軸から、4つの態度を呈示している。すなわち、支配と保護に偏重するかまいすぎ型、支配と拒否に偏重する残忍型、保護と服従に偏重する甘やかし型、そして、拒否と服従に偏重する無視型である (1939)。また、いくつかの研究では、親の養育態度が受容的な場合に比べて、拒否的な場合は子どもの性格や行動が攻撃的で自己顕示的になるとされている。いずれにしても、親の養育態度は、子どもの発育・発達における大きな要因であり、家庭の重要な機能の一つであることに疑いはない。

明治維新直後に越後・長岡藩家老稲垣家に生まれ、西洋に日本文化を伝えた杉本鉞子 (1873～1950) の「武士の娘」(原題:A Daughter of the Samurai) の「寒稽古」のくだりには、当時の厳しい家庭教育の様子が記されている。寒稽古とは、寒の間の30日間、難しいことを長い時間かけて練習するならわしで、十歳にも満たない鉞子が習字の手習いに励むのである。

「居心地よくしては天来の力を心に受けることができないということになっていましたので、火の気の無い部屋でお習字をいたしました。日本家屋の構造は、熱帯地方にその源を発していますので、火鉢一つない部屋の温度は戸外のそれと変わりございません。お手習いは長い時をかけて、入念にいたさなければならぬものですから、その朝すっかり指がこごえてしまいました。が、振返って、後ろに控えていた(女中の)いしが、紫色になった私の手を見つめて、すすり泣きしているのを見ますまで、それと気付かないのでした。当時は、私ぐらいの年頃の子供をさえきびしくしつけたものでございまして、稽古が終わるまでは、私も動かず、いしも亦じつと付添っていたわけでございます。」(大岩美代訳「武士の娘」ちくま文庫 p.37 括弧部分は筆者追記)

なぜ幼い娘にこのような厳しい勉学を強いたのであろうか。武家であったからか。日本文化は形から入るものが多く、勉学も精神・形から入ったからか。封建制度の残滓か。いずれにしても当時の状況・時代背景では当然のことである。しかし、鉞子は長男・長女ではない。その頃の稲垣家は、長兄は出奔中、長姉は嫁ぎ先も決まり花嫁修業中という事情はあったかもしれないが、むしろ幕府や藩の支配を離れ武士の世から明治という新時代を迎え、たとえ女性であっても時代を乗り切る術を身に付けてほしいとの思いが両親にあったからであろう。そして、その教育は旧来からのしきたり・思想に基づいて行われたのである。当時の一般的な親の養育態度は、サイモンズの分類によれば支配と服従の軸を中心に規定されていたとも言えよう。

では、この教育思想はどこから由来するかを考えてみると、男尊女卑的な東洋思想・儒学的考え方に基づいている。孟子の母は、孟母とも呼ばれ、列女であったとされるが、彼女の養育態度は、鉞子の両親以上に厳しいものであったと伝えられている。いわゆる、孟母三遷、孟母断機と表現される女性像が存在し、子どもに対する支配的側面が色濃く打ち出され、そのような母性が子に対する養育態度の東洋的理想像とされてきたのである。しかしながら、孟母三遷、孟母断機の逸話からは、男尊女卑的な女性が一歩へりくだった姿をイメージすることはできない。では、いつどのような時期から母は子に対して卑的立場をとるようになるのであろうか。その答えも孟母は示している。孟子が齊の国に仕えながら、君主に重用されず、無力感に苛まれている時、孟母は叱咤激励するのではなく、女三従を語るのである。すなわち、「幼くしては父母に従い、嫁げば夫に従い、夫の死後は子に従う。これが女の定め。あなたは立派に成人し、そして私は年老いた。あなたは自分の考えに従って行動しなさい。私は私の定めに従いましょう」

社会的に自立した子どもに対しては、母の役割は支配ではなく、定めに従い子に服従することを示唆しているのである。母や女性の配慮により卑の立場に自らが退くことで、相対的に父親や男性の権限が絶大な立場に祭り上げられ、儒教社会の秩序が保たれてきたのである。子どもの養育態度における孟母の母性・出处進退・匙加減こそが東洋思想「中庸」の真髓ではなからうか。教育者や養育者は、男尊女卑的東洋思想を今一度見直す時である。